

能代高

③

春よ来い

時は大正十四年、吉武栄一（一期、能代市議）が一年の冬。場所は、体操場を板で仕切っただけの仮教室。

「マントでも着てねば、寒びして、授業どころでね」

吉武はそう思った。机を並べる同級生のだれもが、同じ思いでなかつたらうか。なるほど、天井の高い体操場では、まきスートの効果も薄い。緊張して授業を受けていたが、刺すような寒さは若い吉武らにもこたえた。

戦後の一時期、教室不足の小中学校では、青空教室とか二部授業をやってピンチを切り抜けた。

たものだ。あのころのせつない体験を覚えている方もあろう。吉武の場合、それと直接関係がないけれど。

「自分たちの教室がほしい」という点では同じだ。

校史によると、能中の開校が決まったのは、大正十三年十二月。翌年四月の開校までそんな間がなく、吉武が希望に燃えて入学した時には、校舎はまだ影も形もなかった。

今の能代公園わきの県立工業講習所（現能代工業高校）で二教室を借り、間借り授業が半年間ほど続いた。吉武は、能代駅に近い母校誕生の地・樽子山へ何度も何度も見に行き、「はえく、オラの学校できねがな」

と白亜の殿堂の出現を心待ちした。工業講習所がある盤若の丘。

から、待望の“樽子山”へ引越したのが、開校の年の十一月。その時点でも依然として校舎は未完成。体操場がもうちよつとで完成という状態。最初の二週間ほどは、

「きょうも体操、あすも軍事教練……」

と連日野外授業。

「一日も早く、樽子山で勉強させたい」

そんな武藤健三郎校長の親心を生徒たちは感じてホロリ……

工業講習所の間借り授業のあとは、体操場での間仕切り授業。吉武はこれにもまた泣いた。初めに書いたように、冬の寒さに大いに震えたのだが、それよりやっかいだったのは、隣の教室が発生源の“騒音公害”。

さすがに複式学級できたえられていた辺地出身の生徒は、あ

まり気にならないふうだったが向こうの教室でしゃべる先生の声がかっちの教室につつ抜けで、お互い、悩まされようし。どつと笑い声でもあがろうものなら、始末が悪い。笑いを抑えるわけにもいかない。

「先生、話なんも聞けねす。なんとかしてけれ」

席が後方の大野寛治郎（元土崎冷蔵社長）などは、被害が最も甚大だった。

英語担当の亀井橋治郎先生などは、

「もう少しのがまんだ」

といいながらも、やむなく教室の真ん中あたりへ“出張”、ぐるり生徒に囲まれるようにしてリーダーを読んだ。

もつとも、すべてに都合が悪かったわけではない。フシ穴だらけの板壁は、テストの時にすごい恩恵をもたらした。直径数

ミリー数形大の秘密ルートを通じ
て「友好」を深め、点数を稼い
だ者が結構いた。壁に耳あり、
ついでに目もあつたわけだ。

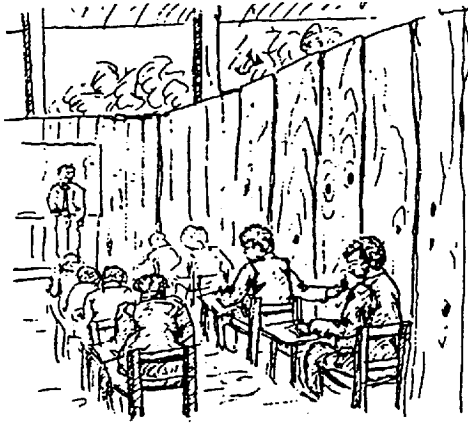
「そういえば、何んぼかせわ
になつたんだ」
という人の名は、ここでは特に
秘しておこう。

木の香も新しい新校舎ついに
完成。それは吉武が二年に進級
してからだった。待つ身は長く
「遅い春」がやつとのことで来

た思いがした。

のちに能中のシンボリック的存在
となつた校門前のプラタナスは
校舎完成記念に、吉武らが植え
たもの。校庭の周りの桜もそう
だ。土壌の関係か、東雲原から
移植した山ツツジは、枯れてし
まったが……。

吉武は、戦後三十年、ずっと
同窓会長。こんなに母校を思う
大先輩は、全国を探しても、そ
うはいない。
(敬称略)



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

能代高

④

ある運命

「兄貴が落第したんですな。
弟がお先に失敬とかなんとかい
つて、一年早く卒業ですよ」
さらに続けて、

「兄貴はずいぶんボヤきまし
た。ええ。うっかりしていたら
アツという間に落第しちゃった
とかいって、ハハハ……」
二、三年後輩だというその人の
話ははずむ。

「ほら、この人がそうなん
ですよ。私が教えたなんていつ
もらつちや困りますかね」

同窓会名簿をめくると、確
かに、一期生に七尾森（しげる）
があり、二期生に七尾静夫が
いる。森は弟で、一期おそい静夫

は兄貴である。

× × ×
「ああ、神も仏もねって、こ
のことだべ」

静夫は、目の前が真っ暗。最
高の屈辱を味わつた気がした。

それというのも、静夫は、能
中の入試に、もの見事にすべ
つたのだ。これだけですめば、
まだいい。おまけがあつた。同
時に受験した一つ年下の弟は、
文句なしの合格！

神様のいたずらにしては、ひ
どい。その年（大正十四年）能
中が開校してなければ、あるい
は静夫のような「悲劇」は生ま
れなかつたかも知れない。しか
し、能中は堂々開校。高等科一
年生の静夫はもちろん受験OK
で、尋常科六年生の森も、やは
り受験資格があつた。

兄貴の自分が落ちるなんてこ
れっぽっちも考えず、兄弟で同

時受験。それが意外な結果となつた。静夫のシヨックは相当なもの。冷やかし半分の町の雑音も聞こえてきた。

「落ちてしまった以上、どうにもならぬ。もう一度やり直すべ」
仲のいい弟に先を越されたが、家にいれば兄貴は兄貴。静夫は気を取り直して翌年の入試に「必勝」を期した。

あの時、父親があんなことをいわなければ、そして、トップで合格していなかったら、静夫は農学校へ行っていたらう。本人はそのつもりだったから。だが、これが運命というのかどうか。結局のところ、静夫も能中を選ぶことになった。

再びめぐってきた受験期のある日、父親がこういった。

「農学校でもどこでも、お前の好きのところへやる。だから、度胸だめしのつもりで、もう一

度能中も受けてみれ」

腕だめしだけなら、やってみてもいいと静夫は二度目を挑戦した。本来実力があつたし、猛勉の成果が実つて今度はトップ合格。先生が静夫の家をわざわざ訪れ、そのことを知らせた。

「せひ息子さんを本校に」
学校からそうすすめられたせいもあつて、雲行きが変わつた。

「はったほいいい」
父親もしきりに「はったほいいい」を繰り返した。とうとう静夫もその気に。

以上のようないきさつで、兄貴のほうに弟よりあとで同じ能中に進学し、卒業したことは間違いない。

成績が良かった静夫は、級長として活躍。教科書は弟のおさがりで間にあい、経済的だった。弟の森は、兄貴をたてて、決して先輩ぶらず、上級生には「絶

対」というのも、七尾兄弟に限つてあてはまらなかつた。

学校を先に出た森は、悲しいことに、死ぬのも先で、ビルマで戦死した。森の死を静夫が知つたのは、戦後しばらくして、長い抑留生活から戻つた時である。いま山本町の森岳温泉病院

労務主任の静夫は思う。

「これも運命なのか……」
能中創立時代には、尋常小、高等小、教員準備所などから受験者が殺到した。表面には出ずとも、七尾兄弟に似たような悲喜劇がうんとあつたらう。

(敬称略)



さし絵は戸松恭一 (新11期・能代高教諭)